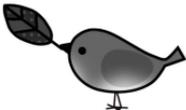
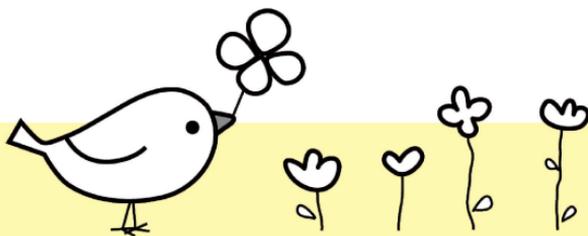


「あなたは    
 幸せである」

“Happy art thou, O Israel”



松田 幸保

「あなたは  
幸せである」

“Happy art thou, O Israel”

松田 幸保



.....

松田幸保（まつだ さちほ）

1973年4月26日生まれ

沖縄やんばるの山の中で、家族と共に暮らしている。

夫、息子（3歳）、姑と一緒にホームサナトリウム

”アドナイ・エレ”で働いて、今年で6年目。

「社長は、イエス様です」。

# 目次

## Contents

|  |    |
|--|----|
| 「あなたは幸せである」……………                         | 1  |
| 「美しい約束」……………                             | 10 |
| 「神には、なんでもできないことはありません。」<br>— 妊娠編 — …………… | 15 |
| 「神には、なんでもできないことはありません。」<br>— 出産編 — …………… | 24 |
| イエス様の心を心とする……………                         | 32 |

# 「あなたは幸せである」

—人生の転機編—



はじめに主の御名を賛美致します。実は、今年  
**は**で私は40歳になりました。40年間、神様が  
命を与えて生かしてくださったことを心から感謝し  
ています。私の名前は、幸保、幸せを保つと書くの  
ですが、改めて自分が幸せであることに気付かされ  
ています。

**1**0年程前のことですが、朝の礼拝で証の書を読  
んでいた時に、目に飛び込んできた聖句があっ  
たのです。「イスラエルよ、あなたはしあわせである。  
だれがあなたのように救われた民があるであろうか」  
(申命記 33：29)。その時、私はガーンと頭を殴られ  
たような気持ちになりました。この聖句を読んだちょ  
うどその頃、私の心の中は自分の置かれた状況に対  
する疑問と不満でいっぱいだったのです。はっと我  
にかえりました。そして、かつて暗黒の中でむなし  
さに押しつぶされそうになっていた自分の生活を思  
い出し、今は、心に空いていた穴が埋められている  
ことに気がついたのです。この聖句は、まさに神様

が私に直接語りかけてくださったものでした。「さちほよ、あなたはしあわせである。だれがあなたのように主に救われた者があろうか」。そして、これまでの歩みを思い出しました。

「われわれは、主がわれわれをいかに導かれたかということと、過去に受けた主の教えを忘れさえしなければ、未来に対して少しも恐れる必要はないのである」(教会への勧告下 465)。

1 3年ほど前、聖所のメッセージに出会って、心がイエス様の光で照らされるまで、私は本当の意味で幸せではありませんでした。恵まれた環境にしながら、全然心が満たされていなかったのです。神戸のアドベンチスト病院で働いていたのですが、体調を崩していました。体のあちこちが故障してがたがたでした。潰瘍性(かいようせい)大腸炎(だいちょうえん)という難病を患い、一生薬を飲み続けなくてはいけないとお医者さんに言われていました。顎(がく)関節症(かんせつしょう)で口が開かず、ひどい頭痛があり、手も顔も湿疹で荒れて赤くなっていて、股関節が悪くいつも腰と足に痛みがありました。そして、いつも心にぽっかりと穴があいていて、どうにかしてそれを埋めようと、海外旅行に行った

り、買い物・食事など友達とのまじわりで心をまぎらわそうとしたり、仕事に没頭してみたり、習い事に明けくれたり…とにかくいろんなことをやってみました。世の中にある楽しみを追い求めていたのです。でも、もちろん穴は埋まりませんでした。体調はますます優れなくなり、仕事をやめて、自然療法を学びたいと思うようになりました。健康の10原則のすべてを守っていなかったのが、病気になって当然だったのですが、病は神様のあわれみをより深く知るためのすばらしい機会だったと感謝しています。

**仕**事を辞めて、一年間カナダへ行くことにしました。不思議な導きにより、ある女性医事伝道者の方に出会い、彼女のセミナーで、初めて聖所の回復のメッセージについて聞きました。聖所のメッセージと健康改革のメッセージが切っても切り離すことのできないものだと教えられ、神の宮の回復とは、天の聖所で起こることだけでなく、私たち自身の体も心も魂も再びみかたちに回復されることだと知ったとき、心の底から感動しました。それまで、病院で働いていて、様々な患者様に出会い、また自分自身も病んでいたことから、心と体は何て密接に関係しているのだろうと、思っていました。しかし、魂、霊的なことと肉体的なこととのつながり

に気付いていなかったのです。言いかえれば、何を食べようが、何を聞こうが、何を見ようが、そのことと自分の霊的な生活とは関係がない！と、思い込んでいたのです。週日何をしようかと、土曜日に教会に行っているから、自分はクリスチャンだと思っていました。でもその反面、自分には何かが足りない、何かが足りない、思っていました。今思えば、それは非常な魂の飢えかわきだったのですが、私は自分自身が心と体だけでなく、何より魂の病におかされ、そこにこそイエス様による癒しが必要だということに、全く気付いていなかったのです。

でも、聖所のメッセージに出会い、イエス様が今も生きて天の至聖所で働いておられ、最後の贖い・特別な清めの働きをされていて、私たちをもう一度みかたちに回復されようとしていることを知ったとき、心から喜びが湧き上がりました。そして、なぜ自分は SDA なのかという問いにも、答えが与えられ、主は生きておられる！と叫びたい気持ちになりました。「イエス様に自分の生涯を捧げたい」と、思いました。バプテスマは中学生の時に受けていましたが、本当の意味でキリストに出会って心を捧げたのは、この時でした。これが私にとっての人生の転機でした。

女性伝道者の彼女と一年間一緒に生活しながら、カナダ・アメリカのあちこちを大きなバン（貨物自動車）に乗って伝道旅行をする中で、今までの生活スタイルが一変しました。生き方が180度変わったと言ってもいいかもしれません。健康の原則に従う生き方を、共に生活する中で教えられ、徐々に体調も良くなりました。荒れていた肌もきれいになり、あちこちの痛みもなくなり、腸の薬も全く必要なくなり、病気も癒されました。日々、どのようにキリストと交わるかを教えられ、毎朝早く起き、祈りとみことばを通して個人的にキリストを知る方法を教えられました。暗唱聖句の歌をたくさん覚えて、何かあればそれを歌って心の支えにすることも学びました。そうする中で、祈ったら御言葉で答えられ、祈ったらまた御言葉で答えられ、という経験がたくさん与えられ、「ああ、神様はこんな小さな私の事も見えておられる」と深い静かな喜びによって、あの心の穴が埋まっていったのです。「聖所はきよめられて、その正しい状態に復する」（ダニエル8:14）。神の宮である私たちの内にこの御業が完成されようとしているのです。このことで、主をほめたたえたい気持ちでいっぱいです。

自分自身の体の病、心の不安、魂の欠乏が癒されたことにより、以前神戸の病院で自分が担当していた患者様方のことが気になりました。あの当時、自分が何とかしてこの方々をよくしてあげなきゃと、僭越にもそのように考えていましたが、唯一の癒し主は神様で、何より彼らの魂にキリストが必要であることを知り、それを伝える働きがしたいと思いました。伝えられずにはいられないと思ったのです。ちょうどその頃、アメリカ、カルフォルニアにある Dessert(デザート) Hot(ホット) Springs(スプリングス) という自然療法の施設に滞在してマッサージと水治療法の勉強をしていた時に、ある素晴らしい経験が与えられました。ある日、シェリルさんという中年の女性が患者として来られました。彼女は繊維性筋痛症(せんいせいきんつうしょう) という難病で、体中に痛みがあり、車いすに座っていて、顔も痛みで歪むほどでした。話を聞いてみると、この病気になって以来あちこちの病院に行ったけどまったく良くなりならず、悪くなる一方で、やっとここにたどり着いたとのことでした。家族関係もうまくいっておらず、ご主人は彼女が8番目の奥さんで、今は別居中。彼の子供たちとの関係も悪く、問題だらけ。経済的にも援助なく、生活も苦しい…本当に辛い辛い毎日だと。彼女の体だけでなく、心も魂も

傷ついて痛みを抱え、助けてほしいと叫んでいるのがよくわかりました。最初のトリートメントは、マリアさんというベテランのセラピストが全身のオイルマッサージをすることになり、私も隣で見学させてもらえることになりました。マリアさんは彼女をマッサージベットの上に寝かせて、静かに手を肩において、祈り始めました。「神様、シェリルさんの痛みを和らげ、病を癒してください。彼女の、生活の必要を満たし、経済的にも支えてあげてください。彼女の心の傷を癒し、魂に平安を与えて下さい。キリストによる救いが与えられますように」。マリアさんは、彼女の体の病のためだけでなく、心の平安も魂の救いも祈ってあげていました。シェリルさんは、泣いていました。その後マリアさんは、彼女の家族のためにも祈り始めました。最後にアーメンと言い終わったときには、マッサージベッドが揺れるほど、シェリルさんは嗚咽していて、そばにいた私ももらい泣きするほどでした。そして、彼女はこう叫びました。「私が受けたかった治療はこれだった！私が一番してほしかった手当はこれだった！今までどこの病院にいてもしてもらえなかったの」。私は、それを聞いて、顎が外れそうになるほどビックリしました。「えっ？まだ、マッサージ始まってないけど？マリアさんは、何の手当てもしてないけど？」と、私にはシェ

リルさんの言葉の意味がすぐには理解できませんでした。今まで、傷つき、悩み、苦しんできた彼女にとって、心からの祈りこそが、一番必要としていた手当だったのです。この事を通して、祈りがどんなに大切かを学びました。その後、マリアさんは「うんうん、そうだったの」と優しく答え、「さあ始めましょう」と言ってマッサージを始めました。

**神**戸で働いているとき、治療の前にその方の体の癒しはもちろんのこと、魂の救いのために祈ることを一度もしなかったことを深く反省し、何事も祈りをもって行うことが、医事伝道の基本なのだと思われ、心に刻まれる体験でした。癒しは、神様からのものです。私たちは、用いていただく器にすぎません。神様からの恵みを伝える器として、生きていくことの素晴らしさを日々教えられ、感謝でいっぱいです。

**聖**句を読みたいと思います。「わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを墓からあがないだし、いつくしみと、あわれみとをあなたにこうむらせ、

あなたの生きながらえるかぎり、良き物をもってあなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる。」詩篇 103：1－5

カナダから帰国して、三倉で数か月お世話になった後、ジョナサングレイさんのセミナーに出席するために、初めて今帰仁に来ることが出来、金城先生とめぐみ先生にお会いしました。医事伝道の働きがしたいと思いつつ、これからどこでどのように生きていったらよいかわからずにいた私に、「行くところがないなら、ここにいらっしやい。一緒に健康プログラムをしよう」と、金城先生が声をかけて下さいました。それから、今帰仁での生活が始まりました。約5年ほど、お世話になった後、結婚し今に至っていますが、その間も様々な経験を通して、神様はめぐみにめぐみを増し加えて下さいました。現代の真理に出会って、イエス様に生涯を捧げたあのとき、あの「人生の転機」以来、試練は幾度もやってきましたが、心の中は本当にしあわせです。「イスラエルよ、あなたはしあわせである。だれがあなたのように救われた民があるであろうか」(申命記 33：29)。今まで、私を導いてくださった神様に感謝し、そのくすしき御業をほめたたえたいと思います。また、多くの方々の祈りと優しさによって支えられ、これまで歩んでこられたことを感謝します。

## 「美しい約束」



**ま**ずはじめに、神様がわたしの肉体的・霊的いやしのために働き続けて下さっていることを感謝し、主に栄光を帰したいと思います。真に、神様は偉大な癒し主です。

**2**003年7月、わたしはアメリカで「ティック」というダニにかまれました。その小さな虫のもつ毒性の強いバクテリアが体中に回り、1週間以内にライム病と呼ばれる病気の症状が現れました。はじめは、頭痛や発熱、悪寒などの症状があり、その後も極度の脱力感と疲れ易さ、脊椎(せきつい)の違和感などに悩まされました。ほとんどをベッドの上で過ごす日々が続きました。しかし、アメリカでの友人の愛情深い手当や祈り、そして日本にいる家族や友人の祈りに支えられ、少しずつよくなってきました。

**9**月に帰国したときには、まだいくつかの症状を抱えており、沖縄での働きに戻ることは不可能だったので、神戸の実家で静養を続けていました。

10月初めのある朝、左肩、肘、手関節の鋭い痛みで目が覚めました。「とうとう関節痛が始まったのか」と恐怖に震えました。自分が Lyme 病の第 2 ステージにすすんでいることがわかったのです。体内のバクテリアがいまだ活動を続けており、彼らが新しい場所を見つけたのでした。

しかし、これも神様の摂理でした。

それから 1 週間の後、イム先生が沖縄で講演をされることになっていましたが、はじめわたしはそれに参加するつもりはありませんでした。自分が沖縄に帰ることはできないと、はじめから決めつけていました。しかし、不思議な方法で神様は道を開いて下さり、わたしの心を変えて下さいました。私は 10 月 12 日、沖縄行きの飛行機に乗ったのです。

イム先生はまずはじめに、わたしの身体からティックというダニが完全に取り出されたかどうかを確認されました。すると、虫の体の一部がまだ残っていたのです！そこから、バクテリアが体内に入り続けていたのでした。虫を完全に取っていただき、そして、すぐにジュースプログラムを始め

ました。レモンジュース(1日レモン6個)、人参ジュース、りんごジュース、青野菜ジュースを1時間ごとに飲むというのですが、数日の内に脱力感、関節痛などの症状が軽くなっていきました。そしてなにより、心に平安が戻ってきたのです。神様がわたしの内から恐怖と不安を取り除いて下さいました。イム先生が「主よ、どうぞ彼女に新しい心と新しい霊、そして新しい身体を与えて下さい」と祈られたとき、「そうだ、そのとおり！神様はわたしに新しい身体を与える力を持っておられる方なんだ」と心の中で叫びました。

**そ** のときから、わたしの体は徐々に徐々に回復へと向かいました。シアトルでも2回のセッションを受ける機会が与えられ、周りの方々に支えられて半年間ジュースのプログラムをさせて頂きました。今では関節痛、脱力感、疲れ易さの症状も消え、働きに戻ることもできました。神様は毎日、その日に必要な力を与えて下さいます。主はほむべきかな。

**ラ** イム病の症状がはじまった最初の週、わたしはこの得体のしれない病気に恐怖を覚え、眠られずに泣きながら祈りました。体内のバクテリアが潜んで活動を続ける限り、肝臓、脳、肺、心臓、

筋肉、関節など様々な器官に入り、種々の症状を引き起こすことをパンフレットで読んだからでした。「神様、約束を下さい！あなたが完全に癒して下さることはわかってるつもりなのですが、体中に見えないバクテリアが怖いのです。どうか、彼らが私の身体から永遠になくなるという約束を下さい。あなたの手を握り続ける事が出来るようにみ言葉下さい！」その日、与えられた約束は、イザヤ 41：10-12でした。

「**恐**れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。見よ、あなたにむかって怒る者はみな、はじて、あわてふためき、あなたと争う者は滅びて無に帰する。あなたは、あなたと争う者を尋ねても見いださず、あなたと戦う者は全く消えうせる。」

**真**に神様は、わたしの身体から敵を全く取り去る力のある方です。しかし、それだけではなく、神様はわたしたちの魂から霊的バクテリア—罪—を全く取り除く力のある方なのです。じーっと寝ている時間の長かったとき、わたしの心の中にある

さまざまな罪が示され、後悔や自責の念にさいなまれました。自分の身体だけでなく、魂が何よりも病んでいることに気付かされました。「神様、私の魂は霊的バクテリアに侵され病んでいます。これらがあなたによって完全に取り除かれるという約束を下さい」と、祈りました。そのときに与えられた約束は同じイザヤ書 43：25、44：22でした。「わたしこそ、わたし自身のために、あなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。」「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから。」

**罪**に汚れた弱い者ですが、主のあわれみによって生かされ、神様が偉大な癒し主であること、そしてみ言葉の内にある美しい約束によって癒しが与えられていることを心から感謝したいと思います。また、たくさんの方々の祈りと優しさによって支えられていることを感謝したいと思います。

\*ライム病：ボレリア菌を保有するマダニ（アメリカではティックと呼ばれる）という野山に棲息しているダニに噛まれた場合にかかる病気で、疲れ易さ、関節痛、髄膜炎、その他の神経系の不調という症状がある。

「神には、なんでもできないことは  
ありません。」

ルカ 1:37

—妊娠編—



**私**の内に神様が成して下さったくすしき御業に  
ついて、証させていただきます。

**私**はライム病になって以来、結婚するまでの5  
年間、女性として本来あるべき月のもの—生  
理が全く止まってしまいました。結婚前に、主人に「私  
は赤ちゃんができない体かもしれないけど、それで  
もいいの？」と泣きそうになりながら聞くと、彼は  
反対にニコニコしながら「子どもが与えられるか  
与えられないかは、神様がきめることだから、さっちゃんは何も気にしなくていいよ、大丈夫。結婚しようね」と言ってくれました。彼の優しさがとても嬉しかった

たけど、私自身は赤ちゃんが欲しかったので、その晩ずっと祈りながら聖書を読んでいました。その時、神様はある一つの約束を与えて下さいました。「子を産まぬ女に家庭を与え、多くの子供たちの喜ばしい母とされる。主をほめたたえよ」（詩篇 113:9）。私はこの約束を握りしめて、いつも心に留めていました。

**結**婚して、数か月たった時、特に何の治療をしなかったわけではなかったのですが、生理が戻ってきました。嬉しくて、嬉しくて、神様はすごいと思いました。しかし、2回ほどでまた止まってしまう、2008年4月以来全く生理はありませんでした。その間、周りからいつも「赤ちゃんまだ？早く作りなさい。」「子どもは欲しくないの？作らないの？」「早く赤ちゃんできたらいいね」などと言われる度に、「お祈りしているんですけど、こればかりは神様にしかわかりませんからね～」と表面上はニコニコしながらかわしていましたが、心の中は乱れ、悲しくなったり苦しくなったりしていました。主人の両親もよく、「家には子どもがいないからさみしいさー、早く欲しいね。」「誰誰の所は赤ちゃんできたってよ、うちもあやかりたいね」と言っていたので、孫の顔を見たがっているのがひしひしと伝わってきました。

いつも心が苦しくなるたびに、夜、泣いて主人に訴えました。「私だって赤ちゃん欲しいけど、できないし、どうすればいいの？」彼は、「さっちゃん、赤ちゃんが与えられるか与えられないかは、神様が決めることだからね」の一点張り。主人にしか自分の体の状態を言っていなかったなので、この気持ちをどうすることもできず、神様に祈りつつ必死で訴えていました。

**去**年の春は特に体調が良くなかったので、自然療法の本をいろいろ調べていたら、やはり自分は不妊症だと思い知らされ、ますます落ち込んでいました。「御心なら赤ちゃんを与えてください、そうでなければそれを受け入れられるようにしてください」と祈りつつも、もし与えられなかった場合、本当にそれが受け入れられるかという、そういう状態ではなく、赤ちゃんが欲しいという気持ちを握りしめ、本当の意味で神様に全ての権利を明け渡すことができている自分がいました。何かがあると、心に人をうらやむ気持ちと自分を憐れむ気持ちが湧き起こり、神様との格闘でくたくたに疲れ果てていました。2009年7月のある朝、赤ちゃんのことでまた心に葛藤があり、泣きながら神様に訴えました。「御心なら与えてください、と祈ることにももう疲れ

ました。私の正直な気持ちは赤ちゃんが心から欲しいということです。もうどうすることもできません。神様、助けてください！」その時、神様からの答えはこうでした。「おまえはもはや足りている。この事については重ねてわたしに言うてはならない」（申命記 3:26）。頭をがーんと殴られたようで、この時わたしは、とうとう神様に降参して、すべてを明け渡す時が来たと思いました。この御言葉は、一瞬厳しい譴責の言葉のように聞こえますが、私にとっては神様の憐みを感じ、ある意味慰めの言葉でした。よく考えてみれば、病気をいやしていただき、こうして普通に動ける体になって、しかも一度だめにしてしまった関係を神様によって破れを繕われて結婚させていただき、この山で恵まれて生かされていることに気付かされました。本当に神様の恵みは、足りているどころか、十分すぎるくらいに十分注がれていると思いました。これ以上何を望むのかと思えるほどでした。「もうどちらでもいい。子どもが与えられなくても、神様の喜ばれる器として主人と二人用いていただければ、それが一番だから、この思いを捨てよう。主が良しと思われることをこの身にしてくださいるように。私は子どもが与えられることをある意味あきらめます。子どもが欲しいという思い、子どもを持つ権利をあなたに明け渡します」と、やっ

と祈ることができました。心がすーっとして、平安が戻り、それ以来何を言われても、何があっても心乱されることなく、落ち着いていられました。そして、以前に与えられた約束(詩篇 113:9)はもしかしたら、他の子どもたちのためにできる限りのことをするようにと神様に言われているのかもしれないと思いました。

8月になり、赤城山学園での通訳の奉仕が始まりました。2週目から、体調がおかしくて、胃が常にむかむかするし、吐き気がありだるくてなんだか変だと思っていました。スケジュールも結構ハードだったので、ただ自分は疲れているのだと思っていました。「つわりかな?でもそんなことあり得ないし…」と思いつつ、何とか仕事をこなしていました。それでも、食べられた物が食べられなくなり、徐々に弱っていったのでおかしいと思い、とうとう最後の週に妊娠検査薬で調べることにしました。忘れもない8月23日の朝、お祈りして検査してみたら、なんと陽性でした。検査薬をもっていった手が震えて、涙が止まらなくて、「何だろう、これは何だろう。神様はなんてすごい方なんだろう」と、ただただ嬉しくて、何と言っているかわかりませんでした。部屋に戻って主人に報告し、二人一緒にひざまずいて感

謝の祈りをささげました。彼は、私たちが新たに主に献身し、与えられた赤ちゃんを主に捧げ、「144,000として3人一緒に生きて主を迎える備えができますように・・・良い父と母になれますように・・・罪深い私たちをどうぞお許してください」と祈ってくれました。私も全く同じ気持ちでした。

**検** 査薬で陽性でしたが、本当に正常な妊娠かどうかかわからず、また妊娠していても本当に自分に産めるのかなという思いがあり、不信仰な私は嬉しい反面、心に不安がつのりました。そんな時、神様はまた約束を与えて下さいました。『『わたしが出産に臨ませて産ませないことがあろうか』と主は言われる。『わたしは産ませる者なのに胎を閉ざすであらうか』とあなたの神は言われる。主はこう言われる、『見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、みなぎる流れのように、もろもろの国の富を与える。あなたがたは乳を飲み、腰に負われ、ひざの上であやされる。母のその子を慰めるように、わたしもあなたがたを慰める。あなたがたはエルサレムで慰めを得る』』（イザヤ 66:9,12,13)。ここを読んで、慰めという言葉が胸にせまり、与えられた赤ちゃんは本当に私にとって慰めの子だと思いました。その時、ノアという名前が与えられました。ノアという

名前には慰め、休息という意味があります。「わたしのうちに思い煩いの満ちるとき、あなたの慰めはわが魂を喜ばせます」（詩篇 94:19）。「あなたの約束はわたしを生かすので、わが悩みの時の慰めです」（詩篇 119:50）。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神はいかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、またわたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にいる人々を慰めることができるようにして下さるのである。それは、キリストの苦難がわたしたちに満ち溢れているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ち溢れているからである」（Ⅱコリント 1:3-5）。

赤城でのセミナーが終わり、函館の実家に行った時に、産婦人科を受診しました。「最終月経は？」と聞かれ、事情を説明すると、先生も看護師さんも不思議そうにしていました。結局、1年以上も生理がないまま妊娠しているので、予定日などを計算するためにも、「とりあえず超音波で見てみましょう」と言われました。検査してみると、画面に小さな手足を動かす赤ちゃんが映し出されました。心臓もピコピコ動いていて、「あー本当に私の胎に命

が宿っているんだ一、生きていてくれたんだ一」と思うと、また涙が溢れました。神様は真に無から有を生み出される方で、「神には、なんでもできないことはありません」という御言葉がいかにも真実であるかを思い知らされました。神様は本当に素晴らしい方です！振り返って考えてみると、7月に「おまえはもはや足りている。この事について重ねてわたしに言ってはならない」と神様に言われたとき、私は赤ちゃんのことをあきらめるように言われていると思っていたのですが、すでに胎の中には命が与えられていたのです。神様はあえて、私がすべてを明け渡して重荷から解放されるように、あの状況へと導いて下さったのだということがわかりました。神様の憐み深さに感動し、胸がいっぱいになりました。その後も、私が不信仰ゆえに不安になる度に、神様は優しく対応してくださり、空に大きな虹を何度も見せて下さいました。「大丈夫だよ、何も心配しなくていいよ。信じなさい、もっと信じなさい。信じる者になりなさい」と言われつづけました。徐々に大きくなるお腹を見るたびに、お腹の中で、ノア君が動く度に、私の信仰を強めるために神様はこの尊い命を与え下さったのだと、つくづく思います。そして、もっともっと神様の力を信じるものになりたいと心から思います。目に見える状況に支配されず、なん

でもお出来になる神様を信じつつ前進していきたい  
と思います。「わたしたちは見えるものによらないで、  
信仰によって歩いているのである」(Ⅱコリント 5:7)。

\* 「ノア」はお腹の中にいる時の名前で、生まれてからの名前は主人が祈りつつ考えてくれています。



「神にはなんでもできないことは  
ありません。」

ルカ 1:37

—出産編—



**妊**娠・出産・子育ての日々を通して、このみ言葉が本当に真実だということを、心に刻まれる経験をさせていただきました。試練の中で、この「神にはなんでもできないことはない」という事を私が本当に信じているかどうかを試され、神様の恵みが大きく注がれることで、このみ言葉が真実であることがさらに深く示されました。

**妊**娠したのもただただ神様の恵みと憐みによるもので、私にとって大きな奇跡だったので、

出産も全て神様の御手の内で守られ、導かれることを信じ祈っていました。なるべく自然な形でお産したいと思い、浦添の助産院に通いながら、自然なお産についての本を読んでは楽しみつついろいろ準備していました。結局、最後の検査で助産院では産めないことになり、浦添総合病院で産むことになりました。

**予** 定日より約3週間早い、3月11日(木)、早朝からいきなり陣痛が始まり、午後1時41分、輝く青空の下、新しい命が誕生しました。「賢い者は、大空の輝きのように輝き、また多くの人を義に導く者は、星のようになって永遠にいたるでしょう。」(ダニエル 12:3)のみ言葉から、空輝(たかき)と名付けました。

**生** 生まれた時、へその緒が首にまいていたこと、胎盤も剥がれて一緒に出たことなどから、産声はあげず、真っ黒でぐったりしていました。すぐに、医師や看護師の方々が処置してくださって、しばらくすると、「ふえ、ふえ」と仔猫のような泣き声をあげました。2342gでした。呼吸も徐々に落ち着き、元気に手足をばたばた動かしていましたが、低血糖のため那覇(なは)市立(しりつ)病院(びょう

いん)のNICUに搬送されることになりました。産後2時間半ほどで、空輝は、主人と救急車で担当医師と一緒に那覇市立病院へ移って行きました。義母もついて行くことになり、私ひとりだけ浦添(うらそえ)総合(そうごう)病院(びょういん)に残りました。10か月間お腹の中でずっと一緒にいたのに、生まれてすぐ離れ離れになり、いきなりの母子(ぼし)分離(ぶんり)に、さみしくてさみしくて私はただただ泣いてばかりいました。空輝もさみしい思いをしているのではないかと思うと、どうしてこんなことになってしまったんだろう…とあれこれ考えては自分を責めたりしていました。その時、去年の8月23日妊娠が分かった日に「神様この子をあなたに捧げます」と、主人と二人ひざまずいて祈ったことを思い出しました。本当に神様に捧げたなら、どんな状況であろうと神様の御手の中にあるはずなので、それを信じているかがまずテストされました。その晩は「神様どうぞあなたの御翼の陰に空輝を宿して下さい。守ってください」と祈りつづけました。那覇市立病院から戻ってきた主人と義母から検査の結果異常なかったことを聞き、ほっとしました。

次の日3月12日(金)、産科病棟のお部屋が空いていたので、私もすぐに那覇市立病院に転

院でできることになりました。13時に NICU に入って、やっと空輝に会えました。鼻からはチューブ、手には点滴、胸には心電図、足には酸素濃度を測るためのものと、小さな小さな体にたくさんのチューブがつながれていて痛々しく、胸が痛くなりましたが、会えたことが何よりも嬉しくて、また泣いてしまいました。母乳を飲ませてもよいと言われましたが、時間制限もあり、少しでも多く飲ませてあげたいと思いつつも、あせってしまってなかなかうまくいきません。足りない分は哺乳瓶で糖水を飲ませることになっていました。嫌がって泣いたり、針を痛がっている姿を見ると、かわいそうになりました。面会は 13 時、16 時、19 時の 1 日 3 回だけです。最後の面会が終わって、部屋に戻ると、いろいろな思いで切なくなり、苦しくて主人に電話で訴えました。「こんなはずじゃなかった。私はできるだけ自然な形でお産して、赤ちゃんに負担のないような自然な形で産後もすごしたいと思ってたのに、どうしてこんなことになってしまったんだろう。神様はどうしてこれをゆるされたんだろう…。」私にはわかりませんでした。主人は、「空輝は神様に捧げた子だから、責任は神様にある。神様がどう出るかをみよう。神様にゆだねたんだから大丈夫。空輝は強いんだよ！」と言って、励ましてくれました。その晩あたえられた

御言葉は、「今のこの時の苦しみはやがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると言うに足りない」（ローマ8:18）でした。とにかく、恵みを数えよう。悪いことを数えるのではなく、良いことを数える側に立とうと、思いなおしました。また、感謝と賛美の力を思い出し、この状況も神様によってゆるされたことなら、万事を益として下さると信じることにしました。覚悟をきめてとことんやろう、やるしかないとお腹にぐっと力をいれました。その晩、「わが恵み汝に足れり」と、神様は繰り返し繰り返し心に語りかけて下さいました。

**次**の日（土）、13時の面会に行ってみると、何と点滴も鼻のチューブも外されていました！そして、面会も3回だけでなく、19時の後も22時1時4時7時10時…と3時間おきに、母乳を飲ませに来てもいいと看護師さんに言われました。安息日に特に注がれる神様の恵みと癒しの力によるものだと思うと、嬉しくてたまりませんでした。少しでも多く少しでも長くそばにいたいと思っていましたので、必死で通いました。

**こ**の入院期間中、多くの方々の祈りと優しさによって支えられました。毎日遠くから通って

くれた主人、おいしいお弁当を作ってくれた義母、面会に来て励ましてくれた友人達、祈りと愛情で支えてくれた家族、教会の方々、友人…本当にありがとうございました。親友がこんなメールを送ってくれました。「今日は空君のことを思いつつ、空君と同じようにかごの中に入った男の子モーセについて学びました。証の文には『母親は熱心に祈って、その子を神の守護にゆだねた』とあって、まさしく幸はこの経験に入らしてもらってるんだなーと感じています。ヨケベデさんの信仰が今日も与えられますように」。このメールを読んで、そっかー NICU のコットル（赤ちゃんを入れている透明の箱型ベッド）はモーセのかごと同じなんだー…神様の守りの御手の内に空輝はいるんだとあらためて知り、すごく嬉しくなりました。空輝の状態も安定していて、5日ほどでNICUを出ることができるようになりました。

**N**ICUを出たら母子同室を希望していたのですが、産科病棟の専用部屋が空いていなかったため、思いがけず担当医師の方から、浦添総合病院にもう一度戻って見ないかと言われました。手続きをしていただいて、3月16日に小さな空輝を抱っこして浦添総合病院に移りました。病棟のみなさんに、おかえりーと暖かく迎えていただきました。浦添総

合病院では、母子同室で同じベッドで寝ながらずっと一緒に過ごせたので、私の心もゆったりと落ち着き、空輝の体重も増え、黄疸の値も下がり、2日で退院できることになりました。

3月18日、退院の際に、看護師さんが母子手帳を持って来てくれた時にこんなことを言っておりました。「3月11日1時41分に生まれましたね。サイコー(3)にいい日(11)、一番(1)よい時間(41)でしたね!」。この言葉を聞いた時、あーそうか!これが神様のご計画だったんだ。全て御手の内であって、しかも最高にすばらしい、最も栄光が現される時と方法だったんだ。これが神様の出産プランだったんだ!と思いました。私の思い描いていた出産プランとは全く違いましたが、浦添総合病院で生まれ那覇市立病院のNICUに搬送されたのも、神様のくすしきご計画だったのです。なぜなら、那覇市立病院で不思議に出会った方々がいたからです。一人は同じ日に男の子を出産したお母さんで、転院する日にお友達になりました。あとから彼女もクリスチャンということがわかり、二人とも出会えたことを心から神様に感謝しました。病棟の看護師さんが何人か、私の食事に興味を持って下さり、健康の話からSDAであることを証する機会も与えられまし

た。神様のなさることは本当にすばらしいです。人間のたてた計画と神様のご計画が全く異なることがよくありますが、それによって、いかに自分が小さく、いかに神様が偉大であるかを知ることができます。「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道はあなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道はあなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」(イザヤ 55:8,9)。こうして、生まれて1週間後、輝く青空の下、空輝と主人と3人で無事に山の家に帰ってくることができました。真に、「神にはなんでもできないことはありません」というみ言葉のとおりでした。

**最**後に「キリストへの道」から、私の大好きな言葉をご紹介します。「神を信じて安んじましょう。神は託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにしてくださいます」。神様のくすしき御業と恵みに心から感謝致します。



## イエス様の心を心とする



**里** 帰りした神戸で、与えられた二つの恵みの経験  
証しさせていただきます。

**ま** ず、はじめに大争闘下 110 から、1844 年当  
時の再臨信徒達がどのように主に会う備えを  
していたかをお読みします。

「**彼**らの心は堅く結ばれ、ともに、そしてお互  
いのために、祈り合った。彼らはしばしば、  
人里離れたところに集まって、神と交わり、とりな  
しの声は野や林から天にのぼった。彼らにとって、  
救い主に受け入れられたという確信は、日ごとの糧  
よりも必要なものであった。もし心に曇りが生じた  
場合には、それが払いのけられるまでは安んじなかつ  
た。彼らは、許されたという恵みの証拠を感じた時に、  
彼らが心から愛している主を仰ぎ見たいと熱望した  
のである。」

このことが、いつも心にあり、半年くらい前にある祈りを捧げました。「神様、あなたとの間でさまたげとなっているもの、人とのわだかまり、清算できていない罪がありましたら、示してください。私の心を清めて下さい」。そのとき、一つの事が示されました。ずっと何年も前に、ある方に対して取った私の態度や抱いた感情についてでした。「謝りなさい、謝りなさい」と何度も神様が言われました。「でも、会いに行けないし、電話番号や住所も分からないし…」と言い訳して、延ばし延ばしにしていました。それでも心に引っ掛かっているのです。ふとした時に思い出され、「謝りなさい、謝りなさい」と神様が語りかけられます。牧師先生の奥様だったので、赴任先の教会宛に手紙をだそうと思っていた矢先に、引退され引っ越しされたと聞き、やっぱりだめか…と思ったりしました。住所なんて調べれば何とかなるはずですが、ごめんなさいがなかなか言えず、先延ばしにしていました。

神 戸の実家に帰った時に、母がその方の証しを見せてくれました。彼女は、大変な痛みや苦しみに耐え、その中でも恵みを数えて賛美しておられました。その苦しみが、私の想像以上だったことがわかり、益々申し訳なく、心から謝りたいと思い

ました。母に住所を調べてほしいと頼んでいたところ、何と安息日の週報で、11/17の礼拝にその牧師先生が関東から来られ、お説教なさることがわかりました。これは、神様が下さった機会、すごい取り計らいだと思いました。わざわざ来るには遠いし、体の事を思えば、奥様は一緒には来られないだろうと思ったので、手紙を先生に託すことにしました。祈りつつ、何日も考え、やっと書き上げました。

その安息日に教会に行ってみると、何とご本人も来られていました。びっくり！礼拝の直後に、彼女の所へ行きました。その瞬間、「さちほちゃん、あら一元気だったー？久しぶりねー。今、どうしているの？」と、以前と変わらず満面の笑みで優しく迎えて下さいました。その時、まだ謝ってもいないのに、もう許されたような気持ちになり、またお会いできたのがうれしくて、神様の深い憐れみに涙が出ました。二人で、楽しかった思い出をいろいろ話しました。そして、以前とてもお世話になったことを感謝し、近況を報告した後で、「実はお詫びしたいことがあって、手紙を書きました。」と言って渡しました。すると彼女は、「あらー、そうなのー？何かしら？楽しみね。」と明るく受け取って下さいました。ご挨拶して別れた後も、神様の取り計らいにた

ただ感謝で、心が軽くなった思いでした。そして最近、沖縄に戻ってきてから、彼女からのお葉書を受け取りました。「気にしないで下さい。私の方こそごめんなさいね」と書かれていました。「そのとががゆるされ、その罪がおおい消される者はさいわいである」(詩篇 32:1)。

**実**はたかきも、ごめんなさいがなかなか言えない時があります。そんな時は一緒に祈ります。「神様、素直にごめんなさいと言える心を与えて下さい。わがままな心を追い出して、イエス様の心を与えて下さい」。祈ると必ず助けが与えられ、小さな声ですが「ごめんね」と言えます。言えると、私もたかきも嬉しくて、「よかったねー」とぎゅーと抱きしめます。するととっても嬉しそうな笑顔が見られます。心が軽くなるんです。ごめんなさいが言えて、許されるのは本当にすばらしい経験だとつくづく思いました。

**も**う一つの恵みの経験は、仲良しのお友達との交わりを通して与えられました。彼女は、2歳と4歳の女の子、6歳の男の子のお母さんです。子育てに悩んでいた時に、子育てセミナーに誘われて行ったそうです。そこで、次のような事を教わっ

たと聞かせてくれました。

- ・旦那さんとお姑さんを大切にし、相手が良ければそれでいいという気持ちで、相手を第一とすることがお嫁さんの一番の幸せ。自分、自分と自分の事ばかり主張しているとなつらいことばかりになるけど、相手、相手といつも相手の事を思っていれば、それが結局は自分にとっての幸せになる。
- ・お姑さんと暮らせる人は幸せ。お姑さんを大切にしている親の姿を見て、子供は学ぶ。
- ・夫婦の間がしっかりしていれば、家庭にすきま風が吹いたり、困りごとが起こることはない。何かあったときには（子供がかぜひいたとかでも）、自分の心に何か悪い思いがなかったか反省すること。すべては心の思いから始まっているから。

**彼**女はこれらの事を教わって、目からウロコだったと言っていました。相手を愛し敬うことは聖書にも書いてあるから、神様を第一として、旦那さんやお姑さんを大切にしよう決心し、実行したそうです。「自分が一番大変な思いをしている、と自分の事ばかり考えているときは、相手に対して

も不満ばかりだったけど、相手の事を思って相手のために、と発想を転換したら、夫とも関係が良くなり、お姑さんとも仲良くなって、結局自分が一番幸せになれた」と話してくれました。彼女自身の気持ちが変わられ、家庭が円満になり、子供達も前よりも穏やかになったそうです。そう話している途中に、2本の電話がありました。旦那さんとお姑さんからでした。とても優しい対応に、実際変えられた彼女の姿を見ました。

**彼**女の話聞いて、私自身も「うちあたい」するところがあり、靈的に祝福して下さいと祈っていたその答えがこれだったんだと分かりました。「あなたには足りないところがある。家族をもっと愛し大切にしてください」との神様からのメッセージでした。沖縄に戻ったら、主人の喜ぶことをいっぱいしてあげたい、お義父さんお義母さんを大切にしたいと心から思いました。相手を思って、相手のために、相手が良ければそれでいいという気持ちで…と意気込んでましたが、ふと、自分にそれが本当にできるのかと不安がよぎりました。またしても自分の力でしようとしていることに気付き、祈りました。「神様、私の内に良きものは何もありません。家族を大切にしたいと思いますが、それを本当に実践していく自

信もありません。助けて下さい」。その時与えられた約束は、ピリピ 2:4,5 でした。「おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ」。イエス様の心をいただくことで、自分の事ではなく人の事を顧みることができます。イエス様は、一瞬たりとも自分のために生きられませんでした。いつも他人を祝福するために生きられました。「無私の奉仕の一生」だったと書いてあります。その心をいただいて、家族や周りの方々を大切にしていきたいと思いました。それが一番の幸せなんだと思いました。

**相**手を優先させるというのは、夫婦間だけでなく、親子や兄弟、友人、教会、職場、どの人間関係においてもいえることだと思います。今日も、キリスト・イエスの心を私の心としていただき、喜びをもって主に仕え人に仕え、イエス様にお会いする備えをしていきたいと思います。

クリスチャン ホームサナトリウム

アドナイ・エレ

☎ 080-5586-1123

〒 905-0221 沖縄県国頭郡本部町伊豆味 2239-4



“わたしは主であってあなたを癒すものである”

(出エジプト記 15 : 26)

当サナトリウムでは健康の8原則を中心に、食事療法、運動療法、水治療法などの自然療法を用いて、健康教育プログラムを行っております。